

SLAVIC  
RESEARCH  
CENTER NEWS

No. 133 May 2013

センター長から

◆ 活動報告とご支援のお願い ◆

宇山智彦



2012年度は、スラブ研究センターにとって大変充実した年でした。グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」は、BRIT (Border Regions in Transition) 福岡・釜山大会など数々の華々しい企画を成功させました。日本の地域研究に新境地を拓いた新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」は、総括シンポジウムを開催し、最終成果を6巻のシリーズとして刊行開始しました。スラブ研本体は、年来の課題であったウェブサイトのリニューアルを実行し、専任研究員による公開講演会を開始するなど、活動が対外的により見えやすくする工夫をしました。専任研究員セミナーの改革など、センター内部の仕組みにも地味な改良を加えました。学会関連の活動では、

JCREES (日本ロシア・東欧研究連絡協議会) と ICCEES (国際中東欧研究学会) 世界大会組織委員会の連携強化をサポートしたほか、地域研究コンソーシアム年次集会・シンポジウム、内陸アジア史学会大会、北海道中央ユーラシア研究会第100回記念大会をそれぞれホストし、またインドでの第4回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンスの開催に協力しました。2015年 ICCEES 世界大会(幕張)の準備を含め、センター教員のイニシアティブで始まった国際的な学会活動が、いまや全国の研究者の間で自主的な盛り上がりを見せているのは、嬉しいことです。

新学術領域研究は2012年度で終了し、グローバル COE も2013年度で終了予定ですが、スラブ・ユーラシア研究における高度な専門性を保ちつつ、世界の諸地域の研究をつなぐ役割を果たすという機能は、センターのアイデンティティとしても学界の要請としても既に定着しており、単純に撤退するわけにはいきません。プロジェクトが終わっても比較研究と境界研究を継続する枠組みを作るべく、13年4月には地域比較部門を准教授2名(任期付き教員を含む)に増員し、また新たに境界研究ユニットを設置しました。センターの広報や研究企画の面では、今年度、北大祭期間中の研究所公開と、北海道大学ホームカミングデーに初参加し、また国立大学附置研究所・センター長会議第3部会のシンポジウムを担当する予定です。

このように、研究活動の充実と広報の両面でさまざまな布石を打ってきましたが、資金面では残念ながら、比較研究と境界研究の継続を意図して申請した科学研究費の多くが不採択になってしまいました。原因はこれから分析しなければなりません。科研費の間接経費の額が前年度比で3分の1以下になるなど、スラブ研は財政的に厳しい状況に直面しています。当面は、これをある種の「一休み」ととらえて、多額の資金を要しない個人研究などを充実させ、研究者ネットワークを地道に維持・拡大していく一方、「冬来たりなば春遠からじ」という気持ちで、共同研究のための次の資金獲得の機会に備えたいと思います。

今年度は組織面でも、共同利用・共同研究拠点中間評価や、国立大学のミッション再定義により、スラブ研の力が試される年となりそうです。全国の国立大学附置研究所・センターの状況を見ますと、大学により、研究所・センターが大学の個性を表す存在として大事にされているところと、存亡の危機に立たされているところに分かれているようです。北海道大学でも、研究所・センターの位置づけや外国人研究員制度の見直しが検討されており、その行く末は予断を許しません。スラブ研のような全国共同利用施設が存続・発展し、研究者コミュニティに有用な事業を展開し続けるには、研究者コミュニティの側からの支援が何よりも重要です。全国のスラブ・ユーラシア研究者および他の地域研究者の皆様には従来から多面的なご支援を賜っていますが、以下のような点でさらなるご協力をいただければ幸いです。

- ・ スラブ研の公募事業（客員教授・准教授、共同利用・共同研究の公募、鈴木・中村基金奨励研究員など）に積極的にご応募・ご参加ください。また蔵書・資料をご利用いただく、外国人研究員を諸学会・研究会・大学での講演にお招きいただくなど、センターのリソースを最大限にご活用ください。
- ・ スラブ研から他大学・他部局の研究者に声をおかけして共同研究を組織するだけでなく、皆様の企画する共同研究にもスラブ研の研究者をより多く引き込んでいただくことにより、双方向的な関係を強化できれば幸いです。専門研究の面はもちろん、プロジェクトの運営や比較研究の経験という面でもお役に立てると思います。
- ・ 他大学・他部局でスラブ・ユーラシア研究者が減ると、センターを拠点とする全国共同利用・共同研究の発展、そしてスラブ・ユーラシア研究全体の発展にブレーキがかかってしまいます。全国の各大学でこの分野の研究を維持・発展させるようご尽力をお願いします。
- ・ その他、スラブ研の活動へのフィードバックやご要望・ご提案をいつでも遠慮なくお寄せください（メール：src@slav.hokudai.ac.jp）。

スラブ研究センターへのより一層の支援を心からお願い申し上げる次第です。



## グローバルCOE

### ◆ 境界研究ユニット（UBRJ）、始動 ◆

2013年4月、北海道大学スラブ研究センター内に境界研究ユニット Eurasia Unit for Border Research (Japan)、UBRJが設立されました（URL: <http://src-hokudai-ac.jp/ubrij/index.html>）。

本ユニットはスラブ・ユーラシア地域及び世界の境界研究を主導し、境界問題を研究する人材を育成することを目的としており、2014年3月をもって事業を終了するGCOEプログラム「境界研究の拠点形成」の後継と位置付けられます。現在、UBRJは、本GCOEプログラ

ム及び境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) と連携した活動をおこなっています。とくに JIBSN との連携は本ユニットの活動の主軸をなしており、与那国町の対台湾交流事業への人材派遣 (嘱託専門員)、根室市北方領土問題対策課へのリサーチ・インターンの導入、対馬市の上対馬 (比田勝) 国境の街づくりプロジェクトなど、キャリアパス及び実務との協力による社会貢献など様々な事業を展開しています。また根室、対馬、与那国、小笠原母島にエトピリカ文庫を創設し、境界問題に関わる資料や情報を現地の方々と共有する試みもおこなっています。

他方で、本ユニットには学内での運営費等の予算措置がなされておらず、事業費の捻出に苦慮しており、皆様の支援をお願いしている次第です。

ご寄附の詳細は、境界研究ユニット HP (<http://src-hokudai-ac.jp/ubrij/donation.html>) まで。[岩下]

### ◆ GCOE チーム、ABS 年次大会に大挙参加 ◆

2013 年 4 月 11 日 (木) から 13 日 (土) にかけて、合衆国コロラド州デンバーで ABS (The Association for Borderlands Studies) 第 55 回年次大会が開催されました。毎年 4 月上旬に催される ABS 年次大会では、これまで、GCOE 「境界研究の拠点形成」所属の研究員のみならず、支援する関係者が継続的に数多く参加し、存在感を示してきましたが、本年は全 34 パネルの内、10 パネルで GCOE 関係者が報告をおこな



GCOE の活動について報告する岩下氏

いました。報告内容と相まって ABS 学会において、本 GCOE は一大プレゼンスを占めるに至っています。本年度は、特に GCOE の若手研究者が主体的に組織した 2 パネル “Mobility Makes the Heart Grow Fonder?: Migration, Repatriation, and Border Crossing Phenomena in Eurasia” および “De-Bordering Processes of Environmental Change and Natural Resources Development, and the Changing Structure of Governance Systems” が設けられたことが特筆されます。

また、世界における境界研究の今後を議論するパネルでは、岩下明裕氏 (GCOE 拠点リーダー) が、GCOE の活動について報告し、日本から海外に向けた活動の一環として、英語誌 *Eurasia Border Review* (EBR) の刊行や、博物館展示に基づく英語版 DVD の作成を紹介しました。会議の 1 つでは、本 GCOE がプロデュースした DVD 「先住民と国境」が上映され、担当者の 1 人である山崎幸治氏 (アイヌ・先住民研究センター、GCOE 事業推進員) による解説もあり、日本のアイヌと北米のヤキの生活世界を結び合わせて考える機会が提供されました。[平山]

## ◆ 新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の終了 ◆

2008年12月に実質的にスタートした新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」はこの3月を持って、終了しました。メンバーの皆様、研究会などに参加していただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

本領域研究の成果については、これまでも内外の学術誌等に発表し、また、本領域研究のディスカッション・ペーパーである『比較地域大国論集』のなかでも発表してきました。よりまとまった形では、ミネルヴァ書房から全6巻の「シリーズ・ユーラシア地域大国論」を刊行します。また、英語でも成果出版をおこなう準備を現在おこなっています。さらに、これまでににおこなわれた国際シンポジウムの報告集2冊も今年度刊行されます。

幸い、新学術領域研究では終了の翌年度に研究成果とりまとめのための科研費が交付されます。これを利用して、上記の出版活動などをおこなっていく予定です。そういうわけで、今年度は、新学術領域研究の事務局やサイトも維持されますので、ご活用ください。最後になりましたが、スラブ研究センターは、これからもスラブ・ユーラシア地域と世界の諸地域との比較をいろいろな形で続けていきたいと考えておりますので、皆様の今後のご協力をよろしく願います。[田畑]

## ◆ ミネルヴァ書房から「シリーズ・ユーラシア地域大国論」 第1巻、第2巻の刊行 ◆



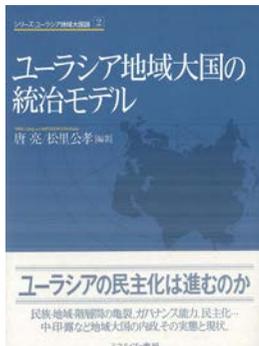
新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」のまとまった成果として、全6巻の「シリーズ・ユーラシア地域大国論」が刊行されますが、そのうちの第1巻と第2巻が3月末に刊行されました。以下の2冊です。

第1巻：  
上垣彰・田畑伸一郎編著『ユーラシア地域大国の持続的経済発展』

第2巻：  
唐亮・松里公孝編著『ユーラシア地域大国の統治モデル』

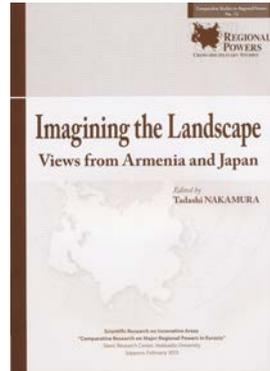


本領域研究では、総括班を除いて、6つの計画研究が組織されましたが、各計画研究が1冊ずつ刊行する予定です。第1巻は計画研究「持続的経済発展の可能性」、第2巻は計画研究「エリート、ガバナンス、政治社会的亀裂、価値」が出版したものです。引き続き、計画研究「国際秩序の再編」による第3巻『ユーラシア国際秩序の再編』、計画研究「地域大国の文化的求心力と遠心力」による第6巻『近代文化におけるユーラシアとアジア』が順次刊行されます。ご期待ください。[田畑]

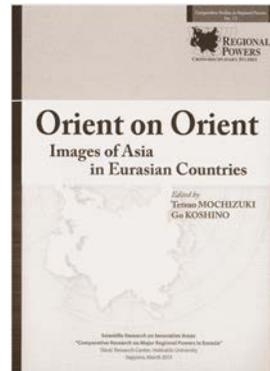


## ◆ 「ユーラシア比較地域大国論集」 No.12、13 の刊行 ◆

第12号の中村唯史編 *Imagining the Landscape: Views from Armenia and Japan* は、2012年9月12日にエレヴァン市で開かれたラウンド・テーブル「想像の風景」での報告に基づく7論文を収録しています。これは第6班「文化」・科研費基盤B「近代以降のロシア文化における南方表象の総合的研究」・アルメニア共和国スラヴ大学が共同で開催したものです。論文の著者はアルメニア、日本、ロシアの文学者ないし文化人類学者で、考察の主題は、アルメニアの伝承・絵画・文様・装飾に見られる「鎖につながれた英雄」モチーフの系譜（アブラミヤン論文）、19世紀中葉のロシア作家による沿ヴォルガ地域ルポルタージュ（望月論文）、収容所の視覚的表象の比較対照（グチノヴァ論文）、アルメニア系英語作家サロイヤンの父祖の地との関係（メリクセチャン論文）その他、多岐にわたっています。その一方、風景や光景を、ナショナリスティックあるいは実体としてではなく、諸時代の痕跡を重層的に包摂し、多様な文化の交錯によって変化する動的構造として捉えようとする視点が共有されています。これは著者たちが、周縁としての自己意識が伝統的に強いアルメニアや日本の関係者であるためかもしれません。[中村唯史（山形大）]



第13号の望月哲男・越野剛編 *Orient on Orient: Images of Asia in Eurasian Countries* は、第6班が中心となって2010年7月7-9日に開催された同名の新学術領域研究国際シンポジウムの成果をまとめたものです。第1部 *Orient on Orient in Cinema* のイリーナ・メリニコヴァ、張英進、シュリニヴァスの3論文はロシア・中国・インドの映画におけるアジア・イメージを分析しています。第2部 *West and East in Music* のベンネット・ゾーン、梅津紀雄、井上貴子の3論文は西欧音楽におけるアジアのイメージおよびインドとロシアにおける西欧音楽の受容を扱います。第3部 *Writers beyond the Border* の小松久恵、杉山直子の2論文はインド系・中国系移民作家の創作を通じてアイデンティティやジェンダーの問題を論じます。第4部 *Orientalism in Dialogue* のツプルマ・ダリエヴァ、富澤かな、アンナ・フロルコフスカヤの3論文は都市景観、植民地経営、非公式芸術という異なった観点から東西のイメージのせめぎあいを分析しています。第5部 *Ideology and Religion* のリュドミラ・ジュコヴァ、応雄、住家正芳の3論文は宗教政策、プロパガンダ芸術、社会進化論を取り上げて、変容する伝統宗教・文化の問題を論じました。14本の論文は多岐にわたるものですが、ロシア・中国・インドという地域大国と西欧や日本との相互関係の中で、様々なアジア・イメージが創造・再創造されていく過程を明らかにしました。[越野]



# 研究の最前線

## ◆ 公開講座 ◆

### 「ユーラシアの現代と宗教」開講中

今年度の公開講座は、「ユーラシアの現代と宗教」と題して、ユーラシア空間において宗教がどのように現代的な社会状況に対応しようとしているかを講義します。イスラーム、正教、ユダヤ教、仏教、反カルケドン派キリスト教、ペイガニズムを網羅しているところが特徴です。主にスラブ・ユーラシア圏の専門家が講師ですが、南アジア専門家として、大阪大学の山根聡教授も登壇します。[松里]

日 程		講 義 題 目	講 師
第1回	5月13日(月)	メッカへの道:イスラーム大国ロシア	北海道大学スラブ研究センター 准教授 長縄宣博
第2回	5月17日(金)	現代ロシア若者の宗教事情:正教会を中心に	大阪大学・同志社大学 講師 有宗昌子
第3回	5月20日(月)	現代ロシアにおけるユダヤ教の現状	大阪大学大学院文学研究科 助教 赤尾光春
第4回	5月24日(金)	伝統宗教か、それとも精神修養の糧か:現代ロシアと仏教	青山学院大学 講師 荒井幸康
第5回	5月27日(月)	アルメニア使徒教会とアルメニア、カラバフにおける自治体建設	北海道大学スラブ研究センター 教授 松里公孝
第6回	5月31日(金)	現代ロシアの呪術リバイバル	総合地球環境学研究所 研究員 藤原潤子
第7回	6月3日(月)	拡散するジハード(聖戦)の大義:現代イスラームの動向と南アジア	大阪大学大学院言語文化研究科 教授 山根聡

## ◆ 専任セミナー ◆

ニュース前号以降、専任セミナーが以下のように開催されました。[家田]

2月28日:山村理人「スラブ・ユーラシア地域における農業構造変動と国際市場への影響:ウクライナの場合」

コメンテータ:田畑伸一郎

今回の山村理人専任研究員セミナーの論文は、山村氏が一貫して取り組んでいる旧ソ連圏の農業再編問題について、ウクライナに例を取って、ソ連崩壊後から現在までの20年間を、生産高、生産組織、流通、貿易など、ウクライナ農業全般にわたって包括的に描くということが分析課題にされています。山村氏の分析によれば、ウクライナは潜在的に穀物輸出国としての巨大な可能性をもっているが、実際にはその可能性が実現していない。その理由は品質面での競争力の低さ、政治的なリスクとも関連する輸出インフラの不安定性、そして現状での価格優位の非持続性である、とのこと。多くの統計資料を駆使した労作となっていますが、国際的要因と国内の生産体制がどう結びついているのかなど、今後の課題も指摘されました。

## ◆ 非常勤研究員セミナー ◆

本年度の2人の非常勤研究によるセミナーが3月8日に開催されました。[家田]

立石洋子“Reframing the ‘History of the USSR’: The ‘Thaw’ and the Change in the Description of the Rebellion of Shamil’ in Nineteenth-century North Caucasus”

センター外コメンテータ：半谷史郎（愛知県立大学）

本論文はシャミール反乱への評価を軸として、ソ連国民史を一次資料に基づいて明らかにしようとした意欲作です。論文は1940年のムラデリのオペラに対する共産党中央委員会の批判などから叙述を説き起こし、その後の評価や政策の変化を丹念に跡付けています。コメンテータの半谷氏からは、音楽史の脈絡では、音楽家相互の人間関係など、複雑な背景があるため、政治的な見方だけでは割り切れない側面があること、歴史家の間でも、世代や地域など出自による複雑な背景が評価に影響している、などの指摘がなされました。全体討論では、学説史上の位置づけについて、北カフカースにおける歴史叙述の他地域との比較、国民史におけるロシア人評価の変遷、帝国史叙述の在り方との関連、オスマン史との係わりなど、多くの有意義なコメントが提示され、セミナー参加者の論文に対する関心の高さがうかがえました。専門誌への投稿論文とのことですので、近いうちに皆様のお目に留まることになると思います。ご期待ください。

本田晃子「映画は建築する：『輝ける道』に見る社会主義リアリズムの象徴空間」

センター外コメンテータ：大平陽一（天理大学）

本田さんは博士論文「天体建築論：イワン・レオニドフと紙上の建築プロジェクト」で第三回東京大学南原繁記念出版賞を受賞されました。おめでとうございます。今回の論文も本田流のソ連芸術論が縦横に発揮された作品です。1939年に開催された全連邦農業博覧会の建築物を素材にするという、本田さんならではの視点が活かされ、それが、さらにこの博覧会を題材として取り込んだ映画『輝ける道』の分析へと進んでいきます。望月哲男氏の評によれば、これは映画を用いた建築論だそうです。「映画は建築する」という、難解な論文タイトルも、そのような含意によるということなのでしょう。コメンテータの大平氏からは、ソ連ロシア芸術史、パノラマ論、遠近法、総合芸術論、アヴァンギャルド、など多面的な切り口で本田論文の意味付けがなされました。本田さんは景観論という新しい分析手法の可能性を押し広げていると言えるのかもしれませんが。この論文も投稿中とのことですので、近くして日の目を見ることとなります。乞うご期待。

## ◆ 研究会活動 ◆

ニュース132号以降、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE研究会、世界文学研究会、北海道中央ユーラシア研究会、昼食懇談会、および公開講演会の活動は以下の通りです。ただし、今号で特に紹介したものは省略します。[大須賀]

- 2月6日 I. セダコヴァ（スラヴ学研究所、ロシア）“Borders in Bulgaria in the Light of Areal Ethnolinguistic Studies: Christmas and Childbirth Ritual Complexes”（GCOE-SRC 特別セミナー）
- 2月8日 武隈喜一（テレビ朝日）「メディアとしての『革命演劇』：ロスタの窓からアジプロ劇へ」（客員研究員セミナー）
- 2月14日 M. カイザー（トリニア大、ドイツ）「今日の中央アジアについてあれこれ（英語）」（昼食懇談会）
- 2月18日 V. ジダノフ（センター）“Укрепление взаимодействия РПЦ с государством: успехи

- церкви, реакция общества (ロシア正教会と国家との協力強化:教会の成功、社会の反応) ” (センターセミナー)
- 2月19日 豊川浩一 (明治大) 「18世紀啓蒙主義と学術遠征:『ヨーロッパ的ロシア人』の形成」(客員研究員セミナー)
- 2月22日 山本忠通 (駐ハンガリー日本大使、元アフガニスタン・パキスタン支援担当特命全権大使) 「平和構築と紛争後の復興と国家建設:日本の貢献、カンボディアとアフガニスタンの例」(GCOE-SRC 特別セミナー)
- 2月26日 林忠行 (京都女子大) 「チェコスロヴァキア軍団と日本:1918-1922年」(客員研究員セミナー)  
中澤佳陽子 (東京大) 「ソログープ作品におけるメレジコフスキー」(センターセミナー)
- 2月27日 貝澤哉 (早稲田大) 「スターリン時代ソ連の美術、映画における女性表象」(客員研究員セミナー)  
今野毅 (北海学園大) 「重税がアルバニアのイスラーム化を促進したのか:オスマン朝期ジズヤ研究の課題と展望」(北海道中央ユーラシア研究会)
- 3月5日 G. サッピーゾヴァ (名古屋大・院) 「ウズベキスタンにおける政党制度及び立憲主義」(北海道中央ユーラシア研究会)
- 3月7日 M. リボヴェツキー (コロラド大、米国) “Амбивалентность как политическая позиция: Трикстеры в советской культуре (政治的立場としてのアンビヴァレンス:ソ連文化におけるトリックスター)” (センターセミナー)
- 3月9日 第14回一緒に考えましょう講座 茂木真二・ノルベルト (在日ブラジル人全国ネットワーク理事) 「東日本大震災二周年追悼 未来に伝えるべきこと」
- 3月11日 I. シャートワ (古典私立大、ウクライナ) 「現代ウクライナのロシア文学研究について:カーニバル文学の新しい研究方法論 (ロシア語)」(センターセミナー)
- 3月13日 スラブ研究センター第4回公開講演会 岩下明裕 (センター) 「日本の領土問題を考える:竹島・尖閣・北方領土」
- 3月20日 新学術領域研究会「ユーラシア地域大国の民族・思想・宗教」 後藤正憲 (センター) 「マルクス主義とナショナリズム:ソ連(ロシア)とインド比較の視点から」;藤倉達郎 (京都大) 「ネパール、北インドのマオイストと民族運動」;木村自 (大阪大) 「中国回族 (ムスリム少数民族) の宗教教育を維持する仕組み」;村上大輔 (中国西藏・日本教育文化交流協会) 「ラサにおける宗教信仰の社会的動態に関する報告:伝統祭祀と大衆文化の事例から」
- 3月22日 小椋彩 (東京大) 「東欧文学における『東』のイメージ研究:ポーランド作家オルガ・トカルチュク氏を迎えて」(センター共同研究報告会)
- 3月29日 Y. ゴルバチョフ (シカゴ大、米国) “A Historically-motivated Classification of the Early Historical Slavic Verb” (センターセミナー)
- 4月5日 竹村寧乃 (北大文学研究科・院) 「ザカフカス連邦 (1922 ~ 1936) はなぜ創られたのか」(北海道中央ユーラシア研究会)
- 4月23日 地田徹朗 (センター) 「アラル海救済策と小アラル海漁業の歴史と現状」(GCOE・UBRJ セミナー)
- 5月2日 『移動の詩学』の可能性を求めて 有信優子 (同志社大) 「«Русская матрешка» の翻訳実践から:翻訳の事例研究とマトリョーシカの歴史」;梅村博昭 (元東京農業大) 「カット『ソヴィエト・ファンタスティカの歴史』における地政学的無意識としての月旅行」;塚崎今日子 (札幌大) 「漂流ステーション『北極1号』と『フォークロア』」;諫早勇一 (同志社大) “Берлин: городской пейзаж с железными дорогами (ベルリン:線路のある都市景観)” ; lu. レヴィング (ダルハウジー大、カナダ) “Водолаз в русской поэзии (ロシア語詩の中の潜水夫)”

# 人事の動き

## ◆ 越野剛氏の准教授就任 ◆

センターは、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の成功を引き継ぎ、その終了後も地域間比較の研究拠点としての機能を維持・向上させることを目的として、北海道大学の全学運用教員制度により、地域比較部門の准教授1名（任期：2013年4月～2018年3月）の枠を獲得しました。これに基づき、「スラブ・ユーラシア（旧ソ連・東欧）地域とそれ以外のユーラシア地域の比較研究」を専門分野とする公募を実施しました。応募者の中から、比較研究の実績と、公募の趣旨に合致した研究計画という基準で厳正な審査をおこなった結果、センターの助教を務めていた越野剛氏の採用を決定し、同氏は2013年4月1日付で准教授に昇任しました。

越野氏の経歴は、2010年4月に助教として採用された際のセンターニュース第121号で既に紹介されていますが、ロシア文学・ベラルーシ文学を専門とする同氏は、近年ではロシアにおける帝国やアジアの表象、戦争の記憶といった方向に研究を広げ、中国研究者やヴェトナム研究者ともネットワークを作ってきました。今後の研究計画では、「ロシア文化におけるアジア・イメージ」、「アジアにおけるロシア文学の受容」、「極東・サハリンの比較文学」、「共産圏における戦争の記憶の比較研究」という4つのテーマを掲げています。助教時代の越野氏が、プロジェクトやシンポジウムの裏方として発揮した有能さは多くの方の目に触れていると思いますが、今後は、個人研究のまとまった成果の発表と、共同研究のリーダーとしての活躍が期待されます。[宇山]

## ◆ 非常勤研究員紹介 ◆

からしま ひろよし  
**辛嶋 博善** 2013年4月に着任（プロジェクトスペース）  
 研究テーマ：文化人類学、モンゴル牧畜社会の研究

なお、昨年度に着任した本田晃子さんは、引き続き今年度も留任されます。[編集部]

## ◆ 2013年度の客員教授・准教授 ◆

公募していました客員教授・准教授は審査の結果、次の6名の方々をお願いすることになりました。  
 [編集部]

氏名	所属	研究テーマ
岩本和久	稚内北星学園大学情報メディア学部	近現代ロシア文学におけるスポーツ表象
大野成樹	旭川大学経済学部	ロシアにおける為替・金融政策に関する研究
貝澤 哉	早稲田大学文学学術院	19世紀後半～20世紀前半のロシアにおける文学生産の場の変容
久保慶一	早稲田大学政治経済学術院	セルビアにおける競争的権威主義体制の成立と崩壊

長與 進	早稲田大学政治経済学部	『チェコスロヴァキア日刊新聞』を読む：軍団／シチェファーニク／シベリア干渉／東アジア
野部公一	専修大学経済学部	旧ソ連諸国における農業構造および農業生産の変容の比較分析

◆ 事務職員 ◆

岸田深雪事務補佐員、畑中誠一事務補助員、山本大悟研究支援推進員、周尾萌美研究支援推進員、乃村美幸研究支援推進員は退職されました。

新任紹介：太田治子事務補助員（図書室）、鈴木真理子研究支援推進員、九石直也研究支援推進員 [事務係]

## 中欧の作家であるということ（オルガ・トカルチュク講演会報告）

### 小掠彩（東京大学研究員）



東京での講演会のようす

スラブ研究センターの「2012年度スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」に採択された研究課題「東欧文学における『東』のイメージの形成と変遷：とくに『移動の文学』に注目して」に基づき、3月初旬、立教大学（東京）および同志社大学（京都）でオルガ・トカルチュク氏の講演会が開催された。トカルチュク氏は現代ポーランドを代表する作家として国内外で圧倒的な人気と影響力を誇るが、今回が初来日となる。作家の

招聘は通常の科研費では実現が難しいため、本研究課題が採択され、来日にかかる諸経費を賄えたことには大きな意味がある。

そもそも本研究は、科研費研究・基盤（B）「東欧文学における東のイメージに関する研究」（代表者：阿部賢一）のメンバーとの共同企画である。上記科研費研究は、「西」（西欧）と「東」（旧ソ連圏）に挟まれた「東欧」と呼ばれる地域における「東」のイメージについて、おもに文学テキストをもちいて検討しようというものだ。国境や政治体制の変化がこの地域にもたらしてきた特殊性について、「移動の文学」という新しいジャンルをも視野に入れて検討を進めている。「移動の文学」は、空間を意識したテキストとして近年「亡命文学」に代わって注目を集めるが、これには移民の文学などのほか、東欧の作家による個人旅行を記した紀行文学も含まれる。それはかつての社会主義体制下ではおよそ考えられなかった自由の象徴だ。

スラ研に具体的な企画（海外からゲストスピーカーを招聘し講演会を実施する）を提出するにあたり、ふさわしい人物としてまず思い浮かんだのがトカルチュク氏だった。氏の出身地はドイツとの間で国境線が引き直されてきた複雑な歴史を持つポーランド西部シロンスクであり、その特異な空間認識は作風にも強く現れている。東欧文学における空間イメージの

探求という研究課題にうってつけだ。とくに2007年に出版された小説『逃亡派』（2008年、ポーランドで最も権威ある文学賞である「ニケ賞」を受賞）は、「旅についての哲学的な思索の書」と評されており、「移動の文学」の最良のサンプルを示してくれそうだった。

2012年1月、スラ研より研究課題採択の知らせを受けると、さっそく日本での講演を依頼する旨、本人に宛ててメールを書いた。返事がきたのは一ヶ月後。相手は人気作家で、一年先であろうと予定



金閣寺をバックに

はどんどん埋まってしまう。私たちもそれを承知のうえで、いったいいつならば、講演を準備したうえで、遠い日本まで来てもらえそうか都合を尋ねた。以前、別件で招待のメールを送ったことがあったが、そのときは先約があり、来日は実現しなかった。今回メールの返事がすぐに来なかったのは、半年以上先の日程を作家が真剣かつ慎重に検討してくれていたためだった。

こうして講演会に向けた準備が始まったが、研究の趣旨に沿った講演を依頼するにあたって、こちらから提示したテーマがいくつかある。東、東欧、境界。あなたにとっての「東」とはいったいどこ（なに）を指しますか。ソ連ですか、あるいは、共産時代の記憶でしょうか。『逃亡派』についてお話ししてくださってもけっこうです。なにしろあの小説のタイトルは、ロシア正教のセクトにちなみますし、じっさい、モスクワを舞台にした挿話もありますから。あるいは仏教や東洋哲学に詳しいあなたにとって、日本こそが遠くて近い東といえないでしょうか。

2013年2月、講演原稿が送られてきた。タイトルは「文学に現れた“中欧”という名のファントム：中欧文学は存在するか」。「東欧」文学における東のイメージ研究の一環、という趣旨説明にもかかわらず、「中欧」地域の定義から入るこの講演に、「東欧」の語はなかった。

そこで思い出されたのは、2009年にクラクフで開催された第2回ポーランド文学世界翻訳者会議だ。筆者はここで初めてトカルチュク氏本人に会った。そしてこの会議中、作家ミーティングの席上で彼女がたびたび強調していたのは、「中欧の作家」としての出自だった。中欧という土地やその歴史が彼女の文学に与えてきた影響は計り知れない。今回の講演原稿も、まさに出自に基づく自己定義から始まっていた。自らの文学体験からふりかえって「中欧」の地域的特殊性を見直すこの試みは、原文で16ページにも及んでいた。一方、あなたにとっての「東」とはなにかと尋ねたときに、私自身が予期していた回答は、文学に対する東欧革命の影響や、ポーランドの東に位置する大国ロシアについての具体的なイメージだった。しかしそれらはいずれもささやかな言及にすぎず、作家はティモシー・ガートン・アッシュを引いたうえで、「私たちはソ連が存在する前からここにいた」と書いてきた。ポーランド人もロシア人もまとめて「スラヴ」と勝手に括りたくなる自分の浅薄さを見透かされたように思い、またそうされることへのポーランド人の牽制とれなくもなかった。作家にとってポーランドとは「東欧」ではなくあくまで「中欧」、「西の周縁」なのだった。

3月1日、立教大学で行われた講演会には延べ80人以上が来場、主催者の予想を超えた盛況となった。コメンテータに沼野充義先生を迎え、阿部賢一氏の司会のもと、久山宏一氏、

三井レナータ氏のすばらしい同時通訳のおかげで講演は滞りなく進行した。2日後、同志社大学の諫早勇一先生のご協力のもと行われた京都講演会も、規模はやや小さかったものの、熱心な読者を含めて20名ほどの来場があった。親密な雰囲気の中、講演後の質疑応答も充実したと思う。ちなみに、両講演会後、これを活字で読みたいという声が多数寄せられたのだが、今夏刊行予定の『早稲田文学』誌上に部分訳が、6月中旬より12月までの期間限定で同誌のウェブサイトにも全文訳が（いずれも久山宏一訳）、掲載される予定である。

なお東京ではこの機を活かし、3月2日東京大学にて、トカルチュク氏のほか、作家のミハル・アイヴァス氏（チェコ）、詩人の山崎佳代子氏（在セルビア）の3人が登壇する朗読会が開催された。同時期に滞日する作家たちが一堂に会しそれぞれの国の言語で自作を朗読するという贅沢な企画で、スクリーンに投影する邦訳づくりやその他の準備に前日まで奔走することになったものの、これも終わってみれば多数の来場者に、主催者の一人として心底うれしく思った。

さて、トカルチュク氏の初来日はご主人同伴だった。東京近郊と京都の見どころを案内したくて方々お連れしたが、とりわけ鎌倉と京都には感銘を受けたようだった。トカルチュク氏が東洋哲学に造詣が深いことは作品やインタビューを通して知っていたが、銀閣寺や三十三間堂を拝観したとき（と、その売店でおみやげの曼荼羅を選んでいたとき）の熱心さが印象に残っている。観光を終えて食事を囲む場では、眼鏡の文学少女だった高校生時代、タルコフスキの映画についてエッセイを書いてコンテストで入賞、賞品が初めてのモスクワ旅行だったこと、オルガという名前はロシア文学を愛する母がつけたもので、妹の名はタチャーナということなど、トカルチュク氏の意外な「東」つながりが開陳されたりもした。そういえば、朗読会後に行われた懇親会の席で、少々酔いのまわった作家が美声を披露してくれた。歌っていたのはウクライナ語の民謡だった。祖母の代で移住してきたため、ウクライナには特別な愛着を抱いているとのこと。作家が言うには、文学は植物のように風土の影響を受ける。いくら世界がグローバル化されようとも。そういう意味で、中欧文学はキノコに似ている。第一次世界大戦で終焉した、一度死んだもののうえに生えひろがってきたから。そう言われるとたしかに、メタファーを多用する詩的な彼女の小説、断片的なその文体は、不連続なこの地域の歴史を、体現しているように見えるのだ。

最後に、本研究課題を審査、採択してくださったスラブ研究センターに心よりお礼申し上げる。また、実施にあたり、企画協力者として名を連ねてくれたセンターの野町素己氏、越野剛氏からは、一年以上にわたり多大な尽力をいただいた。とくに作家滞日中の1週間、成田から関空までの全日程におつきあいいただいた。心よりお礼申し上げる。

## ウラジーミル・ソローキン『青い脂』の文学賞 受賞に寄せて

松下隆志（北大文学研究科博士後期課程3年）

日本のある異端作家が「少数者は空想する 空想するが故に少数者である」と記しているが、ロシアの現代作家ウラジーミル・ソローキンの長編『青い脂』（1999年、邦訳2012年、河出書房新社）はまさにそうした「空想する少数者」のために書かれた物語といっても過言ではないだろう。ドストエフスキー2号やトルストイ4号といったロシアのクローン作家の執筆過程から産出される「青<sup>せいし</sup>脂」なる物質を巡り、未来のロシア人やパラレルワールドのスターリンやヒトラーが熾烈な争いを繰り広げる——このような破天荒な筋書きを持つ作品の性格

を端的に言い表すことはできない。何の予備知識もなしに本作を手を取った読者はきっと度肝を抜かれるに違いない。

冒頭からして、「トップ=ディレクト」「リプス」「Lハーモニー」といった奇妙な造語や「老外」「你媽的」といった中国語のオンパレードで読者を面食らわせる。巻末にはご丁寧に用語解説が付されているが、「Lハーモニー……生物や物質が持つシュナイダー野の平衡度」といった具合に、説明自体がさらなる説明を要するような、いかにも人を食ったものになっている。並大抵の読者ならば、この時点で十中八九読むのをやめるだろう。しかし、もう少し我慢して読み進めていけば、こうした造語や中国語の群れにある種の身体性が宿り、読むことの快楽が生じるはずである。作品世界に深く没入すれば、やがて現実の日常生活のなかでも「リプス・你媽的」と作品世界の言葉がふと口をついて出るようになるだろう（実際、帯文を書いて頂いた翻訳家の岸本佐知子さんはよくTwitterで「リプス」とつぶやいておられる）。

言うなれば、『青い脂』を読むことは、言葉のわからない外国の街に突如放り出されることに似ている。自分には理解できなくとも、その世界の人々の間ではその言葉によって意思の疎通が図られ、コミュニケーションが成立しているのである。こうした独自の言語世界を仮構したソローキンの想像力には脱帽する他ないが、この作品を翻訳するために、筆者はロシア語という外国語に加え、さらに作品内言語という第二の外国語も相手にせねばならないという「二重苦」を背負わされることとなった。参照した独仏の翻訳では造語はほぼそのまま音写されていたが、文法的にロシア語と大きく懸け離れた日本語ではそうはいかない。テキストで語られていること（あるいは語られていないこと）をああでもないこうでもないこと共訳者の望月哲男氏と推測し、四苦八苦しながら日本語として違和感のない表現に仕上げている。

そのような苦勞の上に完成した日本語版『青い脂』だが、文体の特異さに加え、内容の方もロシアの文学・文化・政治全般に対する過激なパロディを含むアンモラルなものなので、翻訳も一部の「少数者」に楽しんでもらえればいいと考えていた。しかし、いざ出版されてみると、たちまち重版がかかり、新聞や雑誌の書評でもたびたび取り上げられ、果ては「ピクベス」と「Twitter文学賞」という二つの文学賞を受賞するという、筆者の想像を遙かに超える大きな反響を呼んだ。

ヒットの理由を考えてみると、まず『青い脂』がSF的な内容だったことが挙げられるだろう。それまでもソローキンは『愛』『ロマン』の翻訳で一部の作家や読者の間でカルト的な人気を誇ってはいたが、それは主として純文学やアート方面の話だった。それに引き替え、近未来もの、歴史改変ものといったSFのサブジャンルへの分類も可能な本作は、風変わりなSF好きの読者にも受け入れられたようだ。昨年十月に京都で行われたSF大会にも出席したが、そこにも多数の読者がいた。近未来パートのルビを多用した文体はギブスの古典的SF長編『ニューロマサンサー』の黒川尚氏の翻訳を少し意識したのだが、会場ではそれを指摘してくれた慧眼な読者の方もおられた。

二つ目の理由としては、コミケや2ちゃんねるといった現代日本で大きな影響力を持つサブカルチャーの存在が、『青い脂』の二次創作や（ときにかなり下品な）パロディを受容しやすくする素地となった可能性である。実際問題として、現代の日本にロシア文化に真剣な興味を抱いている人間はそう多くはないと思われるが、ソ連の「アカ」的な部分や軍事兵器などにオタク的な嗜好を示す者たちは少なからず存在する。さらに、筆者がとくに驚いたのは、いわゆるBL（＝ボーイズラブ）小説好きの読者までもが『青い脂』を読んでいるということだった。『青い脂』がポルノだとして裁判沙汰にまで発展したロシアで日本の反響を話したらどう思われるのだろうか。



Twitter 文学賞のトロフィーのあみぐるみと『青い脂』

『青い脂』の内容がロシア・ソ連の歴史や文化と深く関わっていることは言うまでもないが、翻訳とはそれが出版された国の文脈からいったん切り離されて受容されることであり、同じ作品でも国によって受け取り方が異なるのもまた当然のことである。たとえば、作品には戯画化されたヒトラーが登場するが、こうした描写をドイツの読者はどう受け止めるのだろうか、あるいは、もし中国語の『青い脂』ができれば（検閲があるので不可能なようだが）中国の読者はどんな反応をするのだろうか、とても興味深いことである。

最後に、『青い脂』が受賞した二つの文学賞について触れておこう。「ピクベス」とは「紀伊國屋書店ピクウィック・クラブ」という紀伊國屋書店新宿本店の文学サークルに所属する文学愛好家の方々がその年の面白かった文学作品（日本・海外含め）ベスト30を決めるというもの。「Twitter 文学賞」はその名の通り読者が Twitter を通じて国内・海外別にその年のベスト作品を投票するというもので、『青い脂』はそれぞれの賞で一位に選出された。どちらの賞もまさに文学玄人の「少数者」の方々に選んでいただいたものであり、『青い脂』に相応しい賞ではないかと思う。ちなみに、「Twitter 文学賞」ではイラストレーターのアлмаジロひだかさんにトロフィーとして素敵な「あみぐるみ」を頂いた。家宝にしたい。

未読の方は是非書店で手にとって頂ければ幸いである。リップス。

## 学 界 短 信

### ◆ JCREES 新体制の発足 ◆

2013年1月25日と2月10日に東京大学文学部3号館でJCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）幹事会が開かれました。2015年に幕張で開催されるICCEES（国際中東欧研究学会）世界大会の準備をよりスムーズに進めるための環境作りが議論され、JCREESが世界大会の主催団体の一つとなること、幹事会と世界大会組織委員会の連携を強化することなどが合意されました。

また、2005年7月以来代表幹事としてJCREESの運営に尽力された袴田茂樹氏が退任し、新しい代表幹事に沼野充義氏（ロシア文学会代表）、副代表幹事に上垣彰氏（比較経済体制学会代表）が選出されました。今後は規約の改正も予定されており、JCREESとしては関係諸学会の連携と国際交流を一層効果的に推進していきたいと考えています。[宇山]

### ◆ ヤロスラフ・ゴルバチョフ氏特別講演会参加記 ◆

2013年3月29日（金）、日本スラヴ学研究会にて、スラブ研究センターの組織によるヤロスラフ・ゴルバチョフ氏（シカゴ大学）の特別講演会がおこなわれた。

ゴルバチョフ氏は、ハーバード大学にてジェイ・ジャサノフおよびカルヴァート・ワトキンスらの下で研鑽を積んだ歴史言語学者で、主にスラヴ諸語およびバルト諸語の通時的研究

の専門家として知られているが、同時にインド・ヨーロッパ諸語比較歴史文法の専門家でもある。今回の“A Historically-Motivated Classification of the Early Historical Slavic Verb”と題された氏の講演は、まさにその二つの密接にかかわる分野を論じるものであった。ゴルパチョフ氏は、インド・ヨーロッパ祖語の動詞形態論の研究はこの30年ほどで大きく進んでいるが、その研究成果は必ずしもスラヴ語の分野にあまり活用されていないと指摘する。これを踏まえ、氏は、インド＝ヨーロッパ祖語の



懇親会の様子（真ん中がゴルパチョフ氏）

動詞システムの最新研究に基づき、スラヴ祖語（および氏によると初期歴史のスラヴ語）の動詞システムを再考し、新たな分類を提案するものである。本講演のタイトルにもある「初期歴史のスラヴ語（Early Historical Slavic）」は、存在が立証されている最も初期のスラヴ諸語（古代教会スラヴ語と古代ロシア語を中心とし、一部のデータを古代ポーランド語と古代チェコ語にも依拠する）を包含する用語として設定されている。ゴルパチョフ氏によると初期歴史のスラヴ語の動詞分類の研究は、主に2つの問題点を抱えている。それらは、1. 適切な共時的説明がないため、従来の分類方法では、例外が非常に多く、また動詞の全ての形を作る（予想する）ことができない点、そして 2. 動詞形態通時的説明が時代遅れとなっている点である。

そこで氏は、以下のような4つの達成目標を掲げた新たな動詞の類型を提示した。第一に、通時的な領域において、近年のインド・ヨーロッパ比較文法の成果を考慮に入れた類型論として、インド＝ヨーロッパ祖語のシステムにある既知の要素とスラヴ諸語との形態的な関係を明らかにする。第二に、共時的な領域においては、任意の動詞からあらゆる形態、特にアオリスト形を作ることを可能にする。第三は、意味論・機能的な視点から、同じグループに分類される動詞が形態だけでなく、意味論・機能的な特徴の上でも整合性がある。第四に、分類の利便性であり、直感的にわかりやすく、類似点の多いグループを隣合わせに配置することが可能である。

紙面の関係で詳しくは書けないが、以上により、氏は動詞グループが12種類に分類されることを示した。ただし、講演後の質疑応答では、僅かな数ではあるが、いくつかの動詞はこの分類には当てはまらず、13項目を立てるべきかもしれないことが議論された。動詞の形態論的分类は、スラヴ語学において「古くて新しい」テーマであり、これまでもレスキーン、ディールズ、ヤコブソン、シェンカーといった、私もスラブ社会文化論の講義で聞いたことがある著名なスラヴ語学者たちが、さまざまな分類を提案してきた。従来の研究成果に挑戦したゴルパチョフ氏の新たな類型は、スラヴ語学、歴史言語学全般の深い知識に基づき、言語の通時、共時、機能といった多角的な視点から整合性のある説明を与える、説得力がある画期的なものであるように思われた。

また、ゴルパチョフ氏の講演は、私のような専門外の人間にも理解しやすく、動詞分類表の達成目標に使いやすさ（user-friendly）という項目が挙げられていることが興味深かった。

なお、本講演は、氏の研究プロジェクト「インド・ヨーロッパ祖語からスラヴ語へ：動詞形態論」の研究成果であり、日本スラヴ学研究会の17号に掲載予定である。[西原周子／文学研究科院生]

◆ 学会カレンダー ◆

- 2013年6月1-2日 比較経済体制学会 2013年度全国大会 於新潟大学  
<http://www3.u-toyama.ac.jp/cfes/horie/jaces-Niigata2013/Program.html>
- 6月22-23日 日本比較政治学会 2013年度研究大会 於神戸大学  
[http://www.jacpnet.org/04\\_taikai.html](http://www.jacpnet.org/04_taikai.html)
- 8月2-3日 スラブ研究センター夏期国際シンポジウム “Border Studies: Challenges and Perspectives in the Twenty-first Century”
- 8月5-6日 ESCAS (欧州中央アジア学会) 第13回大会 於アスタナ <http://www.escas.org>
- 8月9-10日 第5回スラブ・ユーラシア研究東アジアコンファレンス 於大阪経済法科大学  
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jcrees/eac2013-papercall.html>
- 10月4日 国立大学附置研究所・センター長会議第3部会シンポジウム 於北海道大学
- 10月5-6日 2013年度ロシア・東欧学会研究大会 於津田塾大学 (JSEES との合同大会)  
<http://www.gakkai.ac/roto/>
- 10月12-13日 ロシア史研究会 2013年度大会 於明治大学
- 10月23-25日 ヘルシンキ大学アレクサンテリ研究所コンファレンス “Russia and the World”
- 10月25-27日 日本国際政治学会 2013年度研究大会 於朱鷺メッセ  
<http://jair.or.jp/event/2013index.html>
- 11月2日 内陸アジア史学会 2013年度大会 於龍谷大学
- 11月2-3日 日本ロシア文学会 2013年度全国大会 於東京大学本郷キャンパス
- 11月21-24日 ASEES (スラブ東欧ユーラシア学会) 年次大会 於ボストン  
<http://aseees.org/convention.html>
- 12月12-13日 スラブ研究センター冬期国際シンポジウム
- 2015年8月3-8日 ICCEES 第9回大会 於幕張 <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/index.html>
- センターのホームページ(裏表紙参照)にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

# 大学院だより

◆ 修了者・新入生・在籍者 ◆

2012年度、大学院文学研究科スラブ社会文化論専修では、4人が修士課程を修了しました。また、櫻間瑛さんが『『クリャシェン』とは何か？ ポスト・ソ連社会における民族＝宗教集団のエスニシティと文化活動』という論文で課程博士号を、左近幸村さんが「海域ロシアの形成：近代ロシアの海運と帝国の統合」という論文で論文博士号を取得しました。皆さんの諸方面での活躍をお祈りしています。4月には、修士課程7名、博士課程1名の新入生を迎えました。今年度の大学院生およびスラブ研究センター研究生は以下の皆さんです。[長縄]

## 2013年度スラブ社会文化論専修大学院生名簿

学年	氏名	研究題目	指導教員(正・副)
D3	井上岳彦	帝政ロシアとカルムイク人	宇山 長縄
D3	大武由紀子	アヴァンギャルド芸術家G. クルーツィスについて	望月 越野
D3	竹村寧乃	ソ連初期ザカフカス連邦	宇山 長縄
D3	秋月準也	ミハイル・ブルガーコフと20世紀初頭のロシア文学	望月 野町
D3	斎藤祥平	言語学者N. S. トルベツコイとユーラシア主義	ウルフ 望月
D3	松下隆志	ゼロ年代以降のロシアにおけるポスト-ポストモダンニズム文学	望月 越野
D3	韓寶麗	中央アジア高麗人社会の「改宗と伝統」問題	宇山 長縄

D2	長友謙治	世界の農産物市場におけるロシアの役割	山村	田畑
D2	西原周子	ヴーク・カラジッチとセルビア標準語	野町	望月
D2	アセリ・ピタバロヴァ	中央アジア諸国・中国間関係における相互認識	岩下	宇山
D1	ヤン・ファベネック	現代における日本と極東ロシアの交流	岩下	田畑
M2	高良憲松	チェコスロバキアの対西側外交 (1945-1948)	家田	野町
M2	河津雅人	ウクライナにおける民主化	松里	宇山
M2	千葉信人	1939-1944年のソ連のフィンランド政策とカレロ=フィン・ソヴィエト社会主義共和国	松里	ウルフ
M2	中田宏治	19世紀初頭の日露外交史	ウルフ	岩下
M2	古川雅規	ロシア語とチェコ語の接頭辞の比較研究	野町	望月
M1	生熊源一	現代ロシアのパフォーマンスアート	越野	望月
M1	植松正明	戦間期エストニアの議会政治、農地改革	松里	ウルフ
M1	高橋伽奈	ロシアの近隣外交とその他諸国外交の関連性	岩下	宇山
M1	平岩史子	ロシアとアメリカのユートピア文学	越野	望月
M1	アリベイ・マムマドフ	ロシアにおける日本の領土問題観	岩下	田畑
M1	真弓浩明	北方領土問題における重層的アプローチの模索	岩下	宇山
M1	李欣燭	中国とロシアにおける対外経済制度改革に関する比較研究	田畑	山村
研究生	小野瑞絵	現代の地域紛争における暴力的非国家主体の分析：中央アジア・コーカサスの事例より	宇山	
研究生	中野智	中央アジア経済	宇山	
研究生	卞曉歆	国際金融危機の衝撃下におけるロシアと中国の経済の比較	田畑	

(新入生の研究題目、指導教員、副指導教員は仮)

## 図書室だより

### ◆ デジタル版『シベリア革命・内戦期新聞集成』の購入 ◆

センター図書室は、昨年末、ロシア革命・内戦期のシベリア各地で発行された新聞のデジタル画像を蒐集した上記資料を購入しました。

全部で121紙、31,000コマ余りの紙面を収録する本集成は、①政府公式紙(10紙、5,222コマ)、②政府地方機関公式紙(18紙、1,827コマ)、③地方自治機関紙(4紙、243コマ)、④政党機関紙(29紙、4,330コマ)、⑤社会団体紙(60紙、19,616コマ)から成り、ロシア各地の図書館・文書館から集められたものです。

特に力が入っているように思われるのが、白系諸政権の機関紙で、全ロシア憲法制定会議員通報(サマーラ、1918年7～10月)、全ロシア臨時政府通報(オムスク、1918年11月)、その後、クーデターによって成立したコルチャーク政権の政府通報(オムスク、1918年11月～1920年1月)が、ほぼ揃っています。

コレクションの中で最大の部分を占めるのは、『シベリア生活』(トムスク、1913年1月～1919年12月)で、このタイトルだけは、革命前の分を含んでいます。この他、分量は少ないのですが、イルクーツクで出ていたチェコ軍団部隊紙(1918年7～8月)などを収録しています。

センター図書室には、コロンビア大学ハーバード・レーマン文庫の資料をもとにしたマイクロフィルム『ロシア革命期新聞コレクション』および、ロシア国立図書館（ペテルブルク）の所蔵資料によるマイクロフィルム『反ソヴィエト系新聞コレクション』（センターニュース102号、2005年8月に紹介）がありますが、これによってさらに、ロシア革命期の地方の状況を伝える史料を充実させることができました。本資料は、センター図書室で、利用可能となっています。[兔内]

### ◆ 附属図書館本館への一部資料の移動について ◆

センターニュース126号（2011年8月）でお知らせした資料再配置の一環として、昨年12月から本年1月にかけて、所在が「スラブ研・事務室（露文）」および「スラブ研・学位論文（未管理換え）」資料の大部分、あわせて約22,000冊を、附属図書館本館東書庫1Fに移動しましたので、お知らせします。

なお、今年度は、これに続いて、所在が、「スラブ研・事務室（欧文）」の資料などを、附属図書館に移動する計画です。[兔内]

### ◆ 利用規則の一部改正 ◆

センター図書室では、これまで、資料貸出サービスの対象を、北大学部学生、大学院生、研究生、および教職員に限っていましたが、この4月より、北海道大学卒業生および大学院修了者のみなさまにも、貸出を行うこととしました。同時に借り出せるのは3冊まで。期限は1ヵ月です。また、これまで学部生の貸出期間は1週間でしたが、これにあわせて1ヵ月に変更しましたので、お知らせします。[兔内]

## 編集室だより

### ◆ 『スラヴ研究』 ◆

『スラヴ研究』第60号は、審査の結果、以下の原稿を掲載することになりました。現在、最終の校正作業を進めています。[長縄]

#### <論文>

- 北見論 象徴秩序の彼方へ：ベルジャーエフの思想における自由と人格の概念をめぐって  
大森雅子 ミハイル・ブルガーコフの教権主義批判における二元論の超克：作家の創作活動とソヴィエト権力との関係を中心に  
高橋沙奈美 ソヴィエト・ロシアにおける史跡・文化財保護運動の展開：情熱家から「社会团体」VOOPIKに至るまで  
三浦清美 『ボリスとグレープについての物語』における語句、「НЕДОУМЬЮЩЕ, ЯКО ЖЕ БЪ ЛЕПО ПРЕЧЪСТЪНЪ」の解釈について：中世ロシアにおけるキリスト教と異教の融合過程の研究  
山本健三 M. A. バクーニンにおけるアジア問題：G. マッツィーニ批判と「黄禍」

今回も掲載数は少ないですが、何らかの形で宗教に関わる力作が揃いました。丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様に御礼を申し上げます。残念ながら不採用となった方も、次回以降ぜひ再挑戦して下さい。次の第61号の原稿締め切りは、2013年8月末の予定です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。

# 会 議 (2013年2月～3月)

## ◆ センター協議員会 ◆

2012年度第6回 2月19日

議題

1. 教員の人事について
2. 内規の制定について
3. 2013年度客員研究員（客員教授・准教授）の選考について
4. 大学間交流協定について
5. その他

2012年度第7回 2月28日

議題

1. 教員の人事について
2. その他

2012年度第8回 3月5日

議題

1. 教員の人事について
2. 2013年度非常勤研究員の選考について
3. 2013年度研究生の受け入れについて
4. 北海道大学スラブ研究センター図書室内規の改正について
5. その他

[事務係]

## 誰が何をどこで

2012年（1～12月）の専任研究員・助教・客員教授・非常勤研究員の研究成果、研究余滴のアンケート調査（提出は任意）を以下のようにまとめました。〔五十音順〕〔大須賀〕

**家田修** ㊦ 1 学術論文 ▼ Introduction for Challenge for New Management beyond the Boundaries; Matrix of Scale and Scheme in Transboundary Environmental Policy (M. Taniguchi & T. Shiraiwa, eds., *The Dilemma of Boundaries: Toward a New Concept of Catchment* [Global Environmental Studies], 193-197, Springer) ㊦ 2 その他業績（論文形式）(5) その他 ▼ オックスフォード大ロシア・ユーラシア研究センターの今とITPプログラムセミナーの開催『スラブ研究センターニュース』128:20-22 ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Academia, Politics, and Civic Participation on the Gabcikovo-Nagymaros Issue in the 1980s' Hungary, International Workshop of Transboundary Symbiosis over the Danube: EU Integration between Slovakia and Hungary from a Local Perspective, Selye University, Komarno, Slovakia (2012.9.12)

▼ 討論者: シンポジウム「原発震災被災地復興の条件: ローカルな声」, 法政大学 (2012.10.20) ▼ 司会: 地域研究コンソーシアムシンポジウム「地域研究と自然科学との協働: 広域アジアの地域研究を例に」, 北海道大学 (2012.11.3) ▼ 大規模環境汚染事故と行政の対応: ハンガリーの事例から, 福島シンポジウム「福島原発事故が飯館村にもたらしたもの: 村民、支援者、ジャーナリスト、研究者の視点から」(飯館村放射能エコロジー研究会主催), 福島青少年会館 (2012.11.18)

**岩下明裕** ㊦ 1 学術論文 ▼ グローバル・ユーラシア: 新しい地政学の創造 (塩川伸明、小松久男、沼野充義『ユーラシア世界5国家と国際関係』43-65, 東京大学出版会) ▼ 国境から世界を包囲する (『京都からの提言: 21世紀の日本を考える』49-62, 京都大学) ▼ 国境離島の相克: ナショナリズムの向こう側『都市問題』8:75-83 ▼ 国境問題を解決する道はどこにあるのか (孫崎享編『検証 尖閣問題』189-222, 岩波書店) ▼ Bolshoi Ussuriiski/Heixiazi (Godfrey Baldacchino, ed., *The Political Economy of Divided Islands*, 212-227, Macmillan) ㊦ 2 その他業績（論文形式）(2) 研究ノート等 ▼ (伊藤薫と共著) 中口国境交渉の今: ヘイシャーズ島から考える『境界研究』3:135-146 (5) その他 ▼ How I Was Interwoven into International Borders: Secret Stories behind the Birth of the Global COE Program “Reshaping Japan’s

Border Studies," *Slavic Research Center News*, 19:15-20 ▼北方領土問題 (濱野剛、堀内賢志、齋藤大輔編『ロシア極東ハンドブック』241-248, 東洋書店) ♯3 著書 ▼(編著)『日本の「国境問題」: 現場から考える』[別冊『環』19] 368 (藤原書店) ♯5 学会報告・学術講演 ▼One Island, Two Countries': A Sino-Russian Bordering Disputed Space, Association for Borderland Studies, Borders and Borderlands: Today's Challenges and Tomorrow's Prospects, リスボン大学 (2012.9.14)

宇山智彦 ♯1 学術論文 ▼「総論 〈東〉と〈西〉: 特にロシアと東方との関係について」[カザフ知識人としての〈東〉と〈西〉] (塩川伸明、小松久男、沼野充義、宇山智彦編『ユーラシア世界1 〈東〉と〈西〉』1-16; 153-179, 東京大学出版会) ▼帝国の弱さ: ユーラシア近現代史から見る国家論と世界秩序 (宇山智彦編『比較帝国論の世界: 新学術領域研究第4班中間成果』[比較地域大国論集7] 3-17, スラブ研究センター) ▼Mutual Relations and Perceptions of Russians and Central Asians: Preliminary Notes for Comparative Imperial Studies (UYAMA Tomohiko, ed., *Empire and After: Essays in Comparative Imperial and Decolonization Studies* [比較地域大国論集9] 19-33, スラブ研究センター) ▼カザフスタンにおけるジュト (家畜大量死): 文献資料と気象データ (19世紀中葉-1920年代 (奈良間千之編『環境変動と人間』[中央ユーラシア環境史1] 240-258, 臨川書店) ▼「帝政ロシア支配の実像とロシア・ムスリム知識人たち」[タジキスタン内戦と和平] (帯谷知可、北川誠一、相馬秀廣編『中央アジア』[朝倉世界地理講座5] 173-182; 285-296, 朝倉書店) ♯2 その他業績 (論文形式) (2) 研究ノート・学会動向 ▼ロシア帝国論 (ロシア史研究会編『ロシア史研究案内』165-179, 彩流社) ▼北海道中央ユーラシア研究会の歩みとこれからの中央ユーラシア研究 (北海道中央ユーラシア研究会編『中央ユーラシア研究を拓く: 北海道中央ユーラシア研究会第100回記念』[スラブ・ユーラシア研究報告集5] 196-201, スラブ研究センター) (3) 書評 ▼藤本透子著『よみがえる死者儀礼: 現代カザフのイスラーム復興』(風響社, 2011) 『人環フォーラム』31:57 ▼高田和夫著『ロシア帝国論: 19世紀ロシアの国家・民族・歴史』(平凡社, 2012) 『ロシア史研究』91:45-50 (5) その他 ▼(大串敦、杉浦史和、平田武、渡邊日日と) パネルディスカッション: ヲ連崩壊20年とその後の世界『ロシア・東欧研究』40:1-33 ▼“Foreword,” in Nazira Nurtazina, “Great Famine of 1931-1933 in Kazakhstan: A Contemporary’s Reminiscences,” *Acta Slavica Iaponica*, 32:105-106 ▼アナトリー・レムニョフ氏を悼む『スラブ研究センターニュース』128:12 (英語版: Obituary: Prof. Anatoly Viktorovich Remnev, *Slavic Research Center News*, 20:8-9) ▼北大「スラブ研」活動知って: 「境界」越え 地域に発信『北海道新聞』(夕刊) 5 (2012.6.22) ▼[インタビュー] 「ユーラシア全体を比較研究」北大スラブ研究センター宇山智彦センター長に聞く『日本経済新聞』(Web刊: [http://www.nikkei.com/article/DGXNASGY05003\\_201C12A0000000/](http://www.nikkei.com/article/DGXNASGY05003_201C12A0000000/)) (2012.10.11) ♯3 著書 ▼(編著)『比較帝国論の世界: 新学術領域研究第4班中間成果』[比較地域大国論集7] 253 (スラブ研究センター) ▼(塩川伸明、小松久男、沼野充義と共編)『ユーラシア世界1 〈東〉と〈西〉』265 (東京大学出版会) ▼(編著) *Empire and After: Essays in Comparative Imperial and Decolonization Studies* [比較地域大国論集9] 133 (スラブ研究センター) ♯5 学会報告・学術講演 ▼Invitation, Adaptation, and Resistance to Empires: Cases of Central Asia, Winter International Symposium “Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order,” SRC, Sapporo (2012.1.19) ▼Party Politics and Premier-Presidentialism in Kyrgyzstan after the Second Revolution: Order in Disorder, Summer International Symposium “From Empire to Regional Power, between State and Non-state,” SRC, Sapporo (2012.7.6) ▼Приглашение, адаптация и сопротивление империям: случаи в Центральной Азии, Международная конференция “Мир империй: ученые, знания и «искусство управления» периферией в колониальных и континентальных империях.” Институт всеобщей истории РАН, Москва (2012.11.12)

ウルフ、ディビッド ♯1 学術論文 ▼Stalin’s Postwar Border-making Tactics: East and West, *Cahiers du monde russe*, 52:2-3 ▼誰が冷戦の勝者なのか: 中ソ対立と「インターキト」(塩川伸明、小松久男、沼野充義編『ユーラシア世界5 国家と国際関係』207-225, 東京大学出版会) ♯2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼Blaine Chiasson, *Administering the Colonizer: Manchuria’s Russians under Chinese Rule, 1918-1929* (University of British Columbia Press, 2010), *Slavic Review*, Spring 2012:199-201 ♯3 著書 ▼(編集) *China’s Post-Revolutionary Borders, 1940s-1960s* [*Eurasian Border Review* 3: Special Issue], 179 (スラブ研究センター) ▼(編集)『同盟と国境: 地域大国を規定するもの』[比較地域大国論集8] 33 (スラブ研究センター) ▼(James Hershberg, Sergey Radchenko, Peter Vamos と共著)「対華国際真相: 揭开中苏关系最后阶段的史实」[「苏联集团国家有关中国和对华国际文件节选(1966-1987)」]『冷戦国際史研究』12:1-31, 283-365 ♯5 学会報告・学術講演 ▼Soviet-Japanese Relations in the Cold War, Davis Center, Harvard (2012.2.14) ▼New Findings on the Russo-Japanese War, Istfak, MGU, Moscow (2012.3.1)

▼“Stalin Unplugged,” “Stalin’s Eurasian Foreign Policy,” Indiana University, Bloomington (2012.9.17-18)

**貝澤哉** ① 1 学術論文 ▼液化化するスクリーン：雪解け以後のソ連《ヌーヴェルヴァーグ》映画『スラヴ文化研究』10:28-39 ▼フォルマリズムはフォルムを拒否し破壊する：同時代の知覚・認識理論とロシア・フォルマリズムの「異化」概念『早稲田現代文芸研究』2:84-99 ▼ポストモダニズムとユートピア／アンチユートピア：現代ロシアにおける「近代」の超克（塩川伸明、小松久男、沼野充義編『ユーラシア世界3 記憶とユートピア』77-100, 東京大学出版会）① 2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等 ▼「小説のいじり方実践編」特別講義 川上未映子『乳と卵』で学ぶ！ 小説読解の最重要ポイント『蒼生 2012』[早稲田大学、文芸・ジャーナリズム論系] 3月号:18-27 ▼ロシア文学：現況と翻訳・研究（『文藝年鑑 2012』103-105, 新潮社）（4）翻訳 ▼（高柳聡子と共訳）タチヤーナ・トルスタヤ著「クィシ」（連載第一回）『早稲田文学』5:258-294（5）その他 ▼（望月哲男、松下隆志と座談会）『青い脂』刊行記念 リプス！ リプス！ リプス！『早稲田文学』5:366-371 ▼（青山南、泉京鹿、岩本正恵、辛島ディヴィッド、きむふな、武田千香、堤康徳、都甲幸治、松永美徳、柳原孝敦、芳川泰久と座談会）十二人の優しい翻訳家たち『早稲田文学』5:206-238 ① 3 著書 ▼（野中進、中村唯史と共編著）『再考ロシア・フォルマリズム：言語・メディア・知覚』229（せりか書房）

**木山克彦** ① 1 学術論文 ▼ロシア沿海地方の渤海土器『海と考古学』8:57-77 ① 2 その他業績（論文形式）（5）その他 ▼GCOE「境界研究」の博物館展示【「境界問題」の体感の場として】（岩下明裕編『日本の「国境問題」：現場から考える』[別冊『環』19] 66-69, 藤原書店）▼グローバル COE 成果展示 第6期～第8期『北海道大学総合博物館ニュース』26:5 ① 5 学会報告・学術講演 ▼モンゴル・ロシアにおける古代・中世遺跡の調査, 内陸アジア・北東アジアにおける古代国家形成の諸問題, 札幌学院大学 (2012.12.8)

**越野剛** ① 1 学術論文 ▼反拿破仑之“冷戦”在文学和漫画中的表现（ナポレオンに対する「冷たい戦争」の文学とカリカチュアにおける表現）『俄罗斯文艺』4:4-9 ① 5 学会報告・学術講演 ▼ポーランド文学における「ベラルーシ派」：ヤン・バルシュチェフスキを中心に, 日本西スラヴ学研究会, 北海道大学 (2012.3.15) ▼ナポレオンのロシア遠征と戦う農民のイメージ, 近現代戦の表象比較研究「戦争のメモリー・スケープ」, 北海道大学 (2012.7.15) ▼1812年と戦う女性のイメージ, 日本ロシア文学会全国大会, 同志社大学 (2012.10.6)

**後藤正憲** ① 1 学術論文 ▼複合する視線：チュヴァシの在来信仰とロシア正教会（塩川伸明、小松久男、沼野充義、宇山智彦編『ユーラシア世界1 〈東〉と〈西〉』183-206, 東京大学出版会）▼Образ Волги в чувашской народной словесности: познавательный аспект, *Вестник Чувашского отделения Российского философского общества*, 5:75-82 ▼ゲンナジイ・アイギのロシア語詩におけるヴォルガの不在『境界研究』3:79-97 ① 2 その他業績（論文形式）（4）翻訳 ▼アレクサンドル・リュースー著「ロシア文学におけるヴォルガの要因：ロシア文化のテキスト学的構造におけるヴォルガのテキスト」（ウェブサイト「ヴォルガ文化圏とその表象をめぐる総合的研究」<http://volga.jp/report/20121020.pdf>）

**田畑伸一郎** ① 1 学術論文 ▼The Booming Russo-Japanese Economic Relations: Causes and Prospects, *Eurasian Geography and Economics*, 53(4):422-441 ▼Observations on Russian Exposure to the Dutch Disease, *Eurasian Geography and Economics*, 53(2):231-243 ▼2000年代のロシアの経済発展メカニズムについての再考『経済研究』63(2):143-154 ▼先行き不透明なロシアの経済動向：2011年の実績と新体制下の見通し『ロシアNIS調査月報』57(5)24-44 [PDF] ▼環オホーツク海地域の経済発展（田畑伸一郎、江淵直人編『環オホーツク海地域の環境と経済』[スラブ・ユーラシア叢書11] 141-166, 北海道大学出版会）① 3 著書 ▼（江淵直人と共編著）『環オホーツク海地域の環境と経済』[スラブ・ユーラシア叢書11] 280（北海道大学出版会）① 5 学会報告・学術講演 ▼Russia, China, and India under Global Imbalances and after, 44th ASEES Annual Convention, New Orleans (2012.11.18) ▼Comparison of Russia, China and India in Terms of International Reserve Accumulation after the Global Financial Crisis, 12th Bi-Annual Conference of European Association for Comparative Economic Studies, Paisley, Scotland (2012.9.7) ▼Comparison of the Mechanism of Foreign Reserve Accumulation in Russia, China and India, Joint conference by the Association for Comparative Economic Studies (ACES), the Japanese Association for Comparative Economic Studies (JACES) and the Society for the Study of Emerging Markets (SSEM) on “Economic and Financial System Development in the Pacific-Rim Region,” Honolulu, Hawaii (2012.5.17)

**等々力政彦** ① 3 著書 ▼（編著）『トウバ音楽小事典』64（浜松市楽器博物館）① 4 その他業績（著書形式）▼『ファンフルトウ 2012年日本公演』22

**宍内勇津流** ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (4) 翻訳 ▼ピウスツキ、プロニスワフ「サハリン島におけるアイヌの経済状態概況」; プロコフィエフ M.M. 「解説: 2つの論文『サハリン島におけるアイヌの経済状態概況』および『サハリン島における個々のアイヌ村落に関するいくつかのデータについて』の原稿について」『環オホーツクの環境と歴史』1 (創刊号):47-62, 63-66 ㊦ 3 著書 ▼ (共編著) 『環オホーツクの環境と歴史』1 創刊号, 87 (サッポロ堂書店) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 『トルキスタン集成』インデックスの分析からわかること, 『トルキスタン集成』のデータベース化とその現代的活用の諸相 2011 年度第 3 回研究会, 京都大学地域研究統合情報センター (2012.1.30) ▼ フィラレート (ドロズドフ) の神学的立場について, 「プラトンとロシア」研究会, スラブ研究センター (2012.2.28) ▼ О библиотеке Центра славянских исследований Хоккайдского университета, Дальневосточная государственная научная библиотека, Хабаровск (2012.9.4)

**豊川浩一** ㊦ 1 学術論文 ▼ Осада оренбурга повстанцами Пугачева (*Повесть А.С. Аушкина "Капитанская дочка" в историко-литературном контексте*, 58-64, Оренбург: ОГАУ) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼安富歩、深尾葉子編『「満洲」の成立: 森林の消尽と近代空間の形成』(名古屋大学出版会, 2009) 『セーヴェル』28:91-97 ▼白倉克文著『ラジーシチェフからチェーホフへ: ロシア文化の人間性』(成文社, 2011) 『ロシア史研究』91:38-44 (5) その他 ▼紀行文「第 3 次現代版プガチョフ叛乱遠征”: キンジャ・アルスラーノフの足跡を訪ねて」『おろしゃ会会報』17:56-68 ㊦ 3 著書 ▼ (共著) 第 5 章第 4 節「ロシア」(中野隆生、中嶋毅編『文献解説 西洋近現代史 1: 近世ヨーロッパの拡大』74-83, 南窓社) ▼ (共著) 第 3 章「近世ロシアの民衆運動」(ロシア史研究会編『ロシア史研究案内』43-58, 彩流社) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 鷗外とロシア: 日露戦争前夜の鷗外と宣教師ニコライ、森鷗外国際シンポジウム「多面体としての《森鷗外》: 生誕 150 周年に寄せて, アルザス (2012.12.9)

**長縄宣博** ㊦ 1 学術論文 ▼ Holidays in Kazan: The Public Sphere and the Politics of Religious Authority among Tatars in 1914, *Slavic Review*, 71(1):25-48 ▼ Мектеб или Школа? Введение всеобщего обучения в среде мусульман Поволжья и Приуралья, *Научный Татарстан*, 1:6-99 (2007 年に英語で発表したものの増補改訂版) ▼ 総力戦のなかのムスリム社会と公共圏: 20 世紀初頭のヴォルガ・ウラル地域を中心に (塩川伸明、小松久男、沼野充義、松井康浩編『ユーラシア世界 4 公共圏と親密圏』71-96, 東京大学出版会) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ 7 月 19 日のカザンにおけるテロの背景に関する一考察『スラブ研究センターニュース』130:18-23 ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 討論者 Session 2: Empires and the “Others”: Mutual Relationships and Perceptions, Winter International Symposium “Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order,” SRC, Sapporo (2012.1.19) ▼ Drawing Russia as a Muslim Power? The Hajj from Tatarstan and Daghestan in the Post-Soviet Era, Summer International Symposium “From Empire to Regional Power, between State and Non-state,” SRC, Sapporo (2012.7.5) ▼ Toward a Seaborne Empire? Bolsheviks in the Arabian Peninsula, 1924-1938, 44th ASEES Annual Convention, New Orleans (2012.11.16) ▼ イスラーム大国ロシア: メッカ巡礼から見える相貌, 津田塾大学国際関係研究所懇談会 (2012.12.20)

**野部公一** ㊦ 1 学術論文 ▼ 変容するロシアの穀物生産: 市場経済移行 20 年 (鈴木直次、野口旭編『変貌する現代国際経済』121-134, 専修大学出版局) ▼ 2000 年代のロシア農業: 生産回復と穀物輸出 (『平成 22 年度世界の食料需給の中長期的な見通しに関する研究・研究報告書』[世界食料プロジェクト研究資料第 3 号] 103-114, 農林水産省農林水産政策研究所) ▼ 旧ソ連諸国における農業改革: 多様化する農業構造と農業生産の変貌 (野部公一、崔在東共編著『20 世紀ロシアの農民世界』363-383, 日本経済評論社) ▼ 構成共和国間分業から国際分業へ: 現代ユーラシア諸国の経済問題・ウズベキスタンの事例 (塩川伸明、小松久男、沼野充義編『ユーラシア世界 5 国家と国際関係』143-160, 東京大学出版会) ▼ 変貌するロシアの農業経営: フェルメルを中心に『専修経済学論集』47(2):95-107 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ 生産回復に転じたロシア農業: 「未来の農業大国」の抱える課題 (下斗米伸夫、島田博『現代ロシアを知るための 60 章・第 2 版』160-163, 明石書店) ㊦ 3 著書 ▼ (崔在東との共編著) 『20 世紀ロシアの農民世界』402 (日本経済評論社)

**野町素己** ㊦ 1 学術論文 ▼ The Kashubian Recipient Passive and Its Grammaticalization (Andrii Danylenko, Serhii Vakulenko, eds., *Gedenkschrift für George Shevelov zum 100. Geburtstag*, 109-136, Munich: Verlag Otto Sagner) ▼ 東欧に架かる言葉の虹: 境界の詩人オンドラ・ウィソホルスキとその言葉 (柴宜弘、木村真、奥彩子編『東欧地域研究の現在』204-224, 山川出版社) ▼ Toward the Preservation and Development of Banat Bulgarian Linguistic Culture: An Outsider's Perspective (*XXI vek Forum za proevropsku komunikaciju*, 14-18, In medias res) ▼ On the So-called Possessive Resultative in Standard

- Serbian Language, *Leptir Mašna* [The literary journal of Balkan studies], 9(1):89-97 ▼セルビア語の言語構造に見る〈東〉と〈西〉: 中東欧・バルカンにおける言語接触 (塩川伸明、小松久男、沼野充義、宇山智彦編『ユーラシア世界1〈東〉と〈西〉』207-231, 東京大学出版会) ¶ 2その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼境界の斯拉ヴ語「ゴラ語」を考える『スラブ研究センターニュース』128:22-25 ▼シカゴ大学に滞在して『スラブ研究センターニュース』131:4-8 ▼(新聞記事) Profesor ud Japonija ij puhodil banátsčite balgare (日本から来た教授がバナト・ブルガリア人を訪問), *Naša glas* (2012.1.2) ▼(新聞記事) Japanese Professor Studies Local Kashubian Language, *Barry's Bay This Week* (2012.8.1) ▼Сећање на академика Милку Ивић (学士院会員ミルカ・イヴィッチ回想) (Зборник Матице српске за славистику, 255-258, Матица српска) ¶ 5学会報告・学術講演 ▼The Revitalization of the Banat Bulgarian Language: Its History, Current Situation and the Role of Transborder Language Politics (with special attention to Serbian Banat), 44th ASEES Annual Convention, New Orleans (2012.11) ▼Contact-induced Grammatical Change: A Case of Kashubian Passive Voice, シカゴ大学スラヴ語・文学科 (2012.5) ▼Two Periphrastic Verbal Constructions in Kashubian in the Context of Language Contact (with a glance toward South Slavic Language), オハイオ州立大学スラヴ語・文学科 (2012.6) ▼On the so-called Possessive Resultative in Serbian Literary Language, シカゴ大学スラヴ語・文学科 (2012.9) ▼Polysemy Copying or Replica Grammaticalization? The Recipient Passive in West Slavic Languages with Special Attention to Kashubian, ワシントン大学文学部スラヴ語・文学科 (2012.11)
- 林忠行** ¶ 2その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼中田瑞徳著『農民と労働者の民主主義: 戦間期チェコスロヴァキア政治史』(名古屋大学出版会, 2012)『西洋史学』246:79-81 ¶ 5学会報告・学術講演 ▼地域研究からみる日本国際政治学会, 日本国際政治学会 2012年度研究大会, 部会2「日本の国際政治学: 学会のあり方と学問のあり方」, 名古屋 (2012.10.19-21)
- 福田宏** ¶ 1学術論文 ▼Central Europe between Empires: Milan Hodža and His Strategy for “Small” Nations (UYAMA Tomohiko, ed., *Empire and After: Essays in Comparative Imperial and Decolonization Studies* [比較地域大国論集9] 35-51, スラブ研究センター) ▼ミラン・ホジャの中欧連邦構想: 地域再編の試みと農民民主主義の思想『境界研究』3: 45-77 ¶ 2その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼中央ヨーロッパの小さな原発大国: チェコとスロヴァキア (若尾祐司、本田宏編『反核から脱原発へ: ドイツとヨーロッパ諸国の選択』375-381, 昭和堂) (3) 書評 ▼小原淳著『フォルクと帝国創設: 19世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察』(彩流社, 2011年)『西洋史学』244:65-67 ▼桐生裕子著『近代ボヘミア農村と市民社会: 19世紀後半ハプスブルク帝国における社会変容と国民化』(刀水書房, 2012年)『西洋史学』246:75-77 ¶ 5学会報告・学術講演 ▼Imagined Central Europe: Utility of Regionalization between East and West, 12th International Scientific Meeting on Border Regions in Transition (BRIT) “Borderland Voices: Shaping a New World Order,” Fukuoka/Busan (2012.11.13-16) ▼Milan Hodža’s Idea of Central Europe: Agrarian Democracy between Germany and Soviet-Russia, 4th East Asian Conference on Slavic and Eurasian Studies “The Image of the Region in Eurasian Studies,” Maulana Abul Kalam Azad Institute of Asian Studies, Kolkata (2012.9.4-5)
- 藤森信吉** ¶ 1学術論文 ▼沿ドニエストル共和国をめぐるビジネスサイクル: 非承認国家と世界経済『ロシア・NIS調査月報』57(4):44-56 ¶ 5学会報告・学術講演 ▼Gaseous Borders: The Former Soviet Republics between Producer and Consumer, ABS Annual Conference, Houston, Texas (2012.4.14)
- 本田晃子** ¶ 1学術論文 ▼ミチューリンの庭: 社会主義リアリズム建築と自然『ロシア語ロシア文学研究』44:154-174 ¶ 5学会報告・学術講演 ▼マスメディア化する建築: イワン・レオニドフと『現代建築』誌, 日本ロシア文学会北海道支部会, スラブ研究センター (2012.6.30) ▼忘却の記憶: アレクサンドル・プロツキとペーパー・アーキテクチャー運動, 北海道スラブ研究会総会, スラブ研究センター (2012.7.26) ▼Socialist Realism Architecture and Soviet Cinema: The All-Union Agricultural Exhibition (VSKhV) in The Shining Path, 4th East Asian Conference on Slavic and Eurasian Studies, “The Image of the Region in Eurasian Studies,” Maulana Abul Kalam Azad Institute of Asian Studies, Kolkata (2012.9.5) ▼映画は建築する: G. アレクサンドロフ監督『輝ける道』から見る全連邦農業博覧会, 日本ロシア文学会全国大会, 同志社大学 (2012.10.7) ▼機械的自然と自然的機械: モスクワ地下鉄建設にみる“自然の克服,” 表象文化論学会, 東京大学 (2012.11.10)
- 望月哲男** ¶ 1学術論文 ▼Nonviolence by Tolstoy & Gandhi: Toward a Comparison through Criticism (Mochizuki Tetsuo, Maeda Shiho, eds., *India, Russia, China: Comparative Studies on Eurasian Culture and Society* [比較地域大国論集11] 149-169, スラブ研究センター) ▼『アンナ・カレーニナ』の比喩について『緑の杖 (日本トルストイ協会報)』9:3-17 ▼三つのヴォルガ像: 1856年の文人調査旅行

から（望月哲男、前田しほ編『文化空間としてのヴォルガ』[スラブ・ユーラシア研究報告集4] 69-104、スラブ研究センター） ㊦ 2 その他業績（論文形式） (3) 書評 ▼キャサリン・メリデール著（松島芳彦訳）『イワンの戦争：赤軍兵士の記録 1939-45』（白水社、2012）『北海道新聞』（朝刊）12（2012.8.12） ▼糸川紘一著『トルストイ：大地の作家』（東洋書店、2012）『週刊読書人』5（2012.8.17） ▼亀山郁夫著『謎解き「悪霊」』（新潮社、2012）『北海道新聞』（朝刊）12（2012.11.4） (4) 翻訳 ▼（松下隆志と共訳）V. ソローキン著『青い脂』392（河出書房新社） (5) その他 ▼恋するアンナ 戦うアンナ（『マリインスキー・バレエ』[2012年日本公演パンフレット] 60-61、野村グループ） ▼（貝澤哉、松下隆志と座談会）『青い脂』刊行記念 リプス！ リプス！ リプス！『早稲田文学』5:366-371 ㊦ 3 著書 ▼（前田しほと共編著）『文化空間としてのヴォルガ』[スラブ・ユーラシア研究報告集4] 174（スラブ研究センター） ▼（前田しほと共編著）*India, Russia, China: Comparative Studies on Eurasian Culture and Society* [比較地域大国論集11] 172（スラブ研究センター） ▼『「アンナ・カレーニナ」を読む』（CD付）89（ナウカ出版） ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼境界を越える思想：トルストイとガンディー，新学術領域第6班合同研究会「生活空間・場の帰国・ジェンダー・探偵小説：ユーラシア比較文化の試み，スラブ研究センター（2012.3.4） ▼Ненасилие как анти-модернизм: Отклик Ганди на идею Толстого на фоне Русско-японской войны, 近代文化：スラブと日本の対話，ペオグラード大学（2012.8.29） ▼Образы Волги: по поводу одной литературной экспедиции в дореформенной России, Круглый стол «Читая ландшафт», Русско-Армянский (Славянский) университет, Ереван (2012.9.12)

## みせらねあ

### ◆ 本田晃子氏、東京大学南原繁記念出版賞を受賞 ◆

2012年12月4日の東京大学出版会理事会において、本田晃子さん（センター非常勤研究員）の論文「天体建築論：イワン・レオニドフと紙上の建築プロジェクト」が、第3回東京大学南原繁記念出版賞を受賞することが決まり、2013年3月14日に授賞式がおこなわれました。

この論文は、本田さんが2011年に東京大学大学院総合文化研究科に提出した博士論文で、東京大学出版会から書籍として刊行される予定です。論文のテーマは、ロシア・アヴァンギャルド建築の代表的人物であるイワン・レオニドフの「紙上建築」です。本田氏は、「紙上建築」は実際に建てられた建築作品に対する二次的なものではなく、むしろ実現した建築物に対抗するもう一つのヴィジョンを提示する独創的な作品だと考えています。講評では、「ロシア語の一次資料を渉猟し、アヴァンギャルドから社会主義リアリズムへという容易には説明しがたい複雑な流れに即した形でソ連の建築を包括的に論じたものは、本論文が初めてであろう」とされ、またレオニドフの建築の展開を、閉ざされたものとしてではなく、写真、映画、演劇、博覧会といった媒体やジャンルとの緊密な関係のうちに描き出したことも高く評価されています。[宇山]

### ◆ 望月喜市氏の叙勲 ◆

4月29日に発表された「2013年春の叙勲」において、望月喜市名誉教授が瑞宝中綬章を受章されました。瑞宝中綬章は、国家または公共に対して積年の功労があった人物に授与されるものであり、望月喜市先生の永年にわたる数々のご功績が高く評価されての受章です。[事務係]

### ◆ センターの役割分担 ◆

2013年度のセンター研究部専任教員の役割分担は、次ページの通りです。[宇山]

センター長 .....	宇山
副センター長 .....	望月
拠点運営委員会委員 .....	宇山/望月/田畑/岩下/家田

#### 【学内委員会等】

教育研究評議会、部局長等連絡会議 .....	宇山
経営協議会 .....	宇山
教務委員会 .....	宇山
図書館委員会 .....	望月
過半数代表者 .....	家田
低温科学研究所運営委員会 .....	宇山
社会科学実験研究センター運営委員会 .....	山村
情報法政策学研究センター運営委員会 .....	家田
創成研究機構連絡会議 .....	宇山
情報ネットワークシステム学内共同利用委員会 .....	山村
オホーツク環境ネットワーク .....	田畑
利益相反審査会委員 .....	家田
環境負荷低減推進員 .....	田畑
男女共同参画企画調査専門委員 .....	山村
ヘルシンキ・オフィス長 .....	田畑

#### 【学外委員等】

国立大学附置研究所・センター長会議（副会長・第3部会長） .....	宇山
国立大学共同利用・共同研究拠点協議会 .....	宇山
JCREES 事務局長 .....	宇山
ICCEES 日本代表 .....	松里
地域研究コンソーシアム理事 .....	宇山
地域研究コンソーシアム運営委員 .....	家田/野町
人間文化研究機構地域研究推進委員 .....	宇山
京都大学地域研究統合情報センター拠点運営委員 .....	岩下
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員 .....	岩下

#### 【センター内部の分担】

大学院講座主任 .....	家田	Manaev, Oleg (2013.6~2013.10) .....	松里
教務委員 .....	長縄	Zaytsev, Ilya (2013.6~2013.10) .....	長縄
入試委員 .....	山村	Bogdanov, Konstantin (2013.11~2014.3) .....	望月
将来構想 .....	望月/田畑/岩下/家田	Erkinov, Aftandil (2013.11~2014.3) .....	宇山
総合特別演習担当 .....	(前期) 長縄/ (後期) 野町	Islamov, Bakhtior (2013.11~2014.3) .....	田畑
全学教育科目責任者 .....	長縄	日本人客員教員 .....	山村
全学教育科目総合講義 .....	長縄	鈴川・中村基金 .....	望月
全学教育科目演習 .....	家田	公開講座 .....	松里
点検評価 .....	松里/田畑/野町	研究会・講演会（専任研究員セミナーを含む） .....	野町
夏期シンポジウム .....	岩下	雑誌編集委員会 .....	長縄/野町
冬期シンポジウム .....	家田		松里/ウルフ/越野
図書 .....	望月	<i>Acta Slavica Iaponica</i> .....	松里/野町/ウルフ
情報・広報 .....	岩下	『スラヴ研究』 .....	長縄
予算 .....	田畑	スラブ・ユーラシア叢書 .....	田畑
外国人研究員プログラム .....	松里	ニュースレター和文（メルマガ・HP・コンテンツ） .....	家田/ (宇山)
Burbank, Jane (2013.6~2013.10) ....	ウルフ	ニュースレター英文（メルマガ・HP・コンテンツ） .....	ウルフ/ (岩下)

## ◆ 人物往来 ◆

ニュース 132 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。  
[宇山／大須賀]

- 2月 6日 Irina Sedakova（スラヴ学研究所、ロシア）
- 2月 11日 Markus Kaiser（トリニア大、ドイツ）
- 2月 22日 山本忠通（駐ハンガリー日本大使、元アフガニスタン・パキスタン支援担当特命全権大使）、  
山本知（京都大）
- 2月 26日 中澤佳陽子（東京大）、長與進（早稲田大）
- 3月 5日 Gyuzel Sapyazova（名古屋大・院）
- 3月 7日 Mark Lipovetsky（コロラド大、米国）
- 3月 9日 茂木真二・ノルベルト（在日ブラジル人全国ネットワーク理事）
- 3月 11日 Irina Shatova（古典私立大、ウクライナ）
- 3月 19日 井上貴子（大東文化大）、小林宏至（首都大学東京）、杉本良男（国立民族学博物館）、中村唯史（山形大）、前島訓子（名古屋大）
- 3月 20日 荒井幸康（青山学院大）、木村自（大阪大）、藤倉達郎（京都大）、村上大輔（中国西藏・日本教育文化交流協会）
- 3月 22日 小椋彩（東京大）
- 3月 29日 Yaroslav Gorbachov（シカゴ大、米国）
- 5月 2日 Iurii Leving（ダルハウジー大、カナダ）、有信優子（同志社大）、諫早勇一（同志社大）、梅村博昭（元東京農業大）大平陽一（天理大）

## ◆ 研究員消息 ◆

兔内勇津流研究員は 2012 年 8 月 15 ～ 18 日の間、科学研究費研究に関する聞き取り調査のため、ロシアに出張。また、9 月 3 ～ 7 日の間、同研究に関するロシアにおける高麗人のディアスポラ研究のため、ロシアに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は 2013 年 1 月 27 日～2 月 6 日の間、研究会出席、打合せ及び資料収集のため、米国に出張。また、2 月 19 ～ 3 月 18 日の間、科学研究費研究に関するインタビュー、シンポジウム、及び研究打合せ等のため、ロシア他に出張。また、3 月 26 ～ 31 日の間、資料収集のため、米国に出張。また、4 月 6 日～5 月 31 日の間、研究打合せ及び資料収集のため、中国に出張。

野町素己研究員は 2 月 8 ～ 18 日の間、科学研究費研究に関する共同研究打合せ及び資料収集・方言調査のため、ベラルーシ、チェコ、ポーランドに出張。また、3 月 13 ～ 18 日の間、同研究に関する共同研究打合せ及び資料収集のため、ロシアに出張。

田畑伸一郎研究員は 2 月 11 ～ 27 日の間、研究打合せ、意見交換及び資料収集のため、フィンランドに出張。また、3 月 3 ～ 20 日の間、同目的のため、フィンランドに出張。また、4 月 25 ～ 27 日の間、国際会議出席及び資料収集のため、韓国に出張。

岩下明裕研究員は 2 月 13 ～ 21 日の間、共同研究打合せ及びセミナー出席のため、フィンランド、オランダ、ベルギー他に出張。また、4 月 9 ～ 15 日の間、国際会議において研究発表のため、米国に出張。また、4 月 16 ～ 21 日の間、研究打合せのため、韓国に出張。

松里公孝研究員は 3 月 4 ～ 30 日の間、現地調査のため、カザフスタン、ロシアに出張。また、4 月 4 ～ 9 日の間、国際会議出席のため、英国に出張。また、4 月 13 ～ 20 日の間、情報収集及び学会出席のため、米国に出張。

長縄宣博研究員は 3 月 9 ～ 31 日の間、資料調査、成果報告及び文献調査のため、ロシアに出張。

山村理人研究員は3月13～24日の間、第4回日露大学合同説明会出席、資料収集及び現地調査のため、ロシアに出張。

家田修研究員は3月13～31日の間、チェルノブイリ原発事故影響研究調査及び関連文献研究調査のため、ハンガリー、ウクライナに出張。

[事務係]

## 年度末から年度始めへ



女性職員用休憩室にて、手作りのチラシ寿司などを持ち寄り、ささやかなお雑パーティをしました。



院生を中心にした歓迎会にて。今年も個性的な新人がたくさん入ってくれました。

\*本州からは、すでに真夏日になったとの報道が聞かれ、「春号」として刊行するには遅きに失した感です。でも、札幌は平年より10日遅れてようやく桜の開花宣言が出されたばかり。今がまさに春たけなわなのです。これは北海道標準の「春号」ということで、ご容赦くださいませ。

## 目 次

センター長から：活動報告とご支援のお願い.....	1
グローバル COE.....	2
境界研究ユニット (UBRJ)、始動／GCOE チーム、ABS 年次大会に大挙参加	
新学術領域研究.....	4
新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の終了／ミネルヴァ書房から「シリーズ・ユーラシア地域大国論」第1巻、第2巻の刊行／「ユーラシア比較地域大国論集」No.12、13の刊行	
研究の最前線.....	6
公開講座「ユーラシアの現代と宗教」開講中／専任セミナー／非常勤研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き.....	9
越野剛氏の准教授就任／非常勤研究員紹介／2013年度の客員教授・准教授／事務職員	
中欧の作家であるということ（オルガ・トカルチュク講演会報告）by 小椋彩.....	10
ウラジーミル・ソローキン『青い脂』の文学賞受賞に寄せて by 松下隆志.....	12
学会短信.....	14
JCREES 新体制の発足／ヤロスラフ・ゴルバチョフ氏特別講演会参加記／学会カレンダー	
大学院だより.....	16
修了者・新生・在籍者	
図書室だより.....	17
デジタル版『シベリア革命・内戦期新聞集成』の購入／附属図書館本館への一部資料の移動について／利用規則の一部改正	
編集室だより.....	18
『スラヴ研究』	
会議.....	19
センター協議委員会	
誰が何をどこで.....	19
みせらねあ.....	24
本田晃子氏、東京大学南原繁記念出版賞を受賞／望月喜市氏の叙勲／センターの役割分担／人物往来／研究員消息	

---

2013年5月24日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	家田修
発行者	宇山智彦
発行所	北海道大学スラヴ研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： <a href="http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/">http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/</a>

---